コミューン往来

No.4

発行は
尼崎市水堂榎木20
榎木荘
今井方

月刊キブツ関西読者会です

伝言板。例会は毎月オ4日曜日ョ。ちなみに5月23日です。

。定期的にこれをホシイと思う方、15円のカンパ

再び備北開拓へ！援農レポート

わたくしは
やまもと
ゆきのりです

本番より長いはじめに

三月下旬から四月初めに、備北開拓地の今井さんのところへ援援農をオ一次とするなら、まあオ二次とも言うべき援農は四月二〇日から始まるか。序章ともいうべきエピソードは、四月二八日、どしゃぶりの雨の中から生まれた。

四月二八日（雨）ー大阪

岡山に運ぶべき荷持をとりにゆくため秋岡さんは、芦屋へ向う。遅れること一時間あまり、五千円なりの中古の軽トラックで、尾関さんと山本、二名、さっそうと国道一号線を西へ。大阪市内を進むうちに、前になり後ろになり共動隊のトラックは並走。あゝ、今日は沖縄デーだ。ナットク。五千円の車だけあって、通行装置は完ぺき。運転席の足もと、助手席の三角窓（ガラスなし）から雨まじりの風がふきぬける。芦屋で、もう一台のトラック（これはレンタカー）に積み残った荷持をつみこむ。荷持とは、四月例会のとき近藤さんから提出された、すなし、ふとん、タタミ、板、セメント、蛍光灯のかさ、諸々。われらはトラク部隊、八時前にしゅっぱーつ。レンタカーには、秋岡、近藤両運転き、軽四（ケイ）は山本運転手と尾関すなーなーターとしか云いようがないんです、ホンマに。まだまだ降り続く雨。またたく間にレンタカーは雨の中に消えていった。こゝならレンタカーとはしばらくおわかれ。五千円とはいえ車は車。走るわ走るわ。ヤッタ、七〇キロ！、ところがやっぱり軽四、ぶっとばすダンプの水しぶきは激しく、太平洋に浮ぶ小舟のようなもの。いつの間にやら道を間違え、急な坂道。時速二〇キロでようやく登り、そこで止ったは最後、車はご嫌をそこねたのか、ウンともスンともいわない。トボ〳〵二人終電車にゆられて大阪へ。垂水（あ、そこ、タルミだったんです）から大阪まで、とっても長かった。電車の中で山本へ（つまりワタクシ）ハッと気がつく。「免許書もってへん」レンタカーで先に岡山へ。大阪について大あわて。岡山やら京都やらへ電話〳〵。

四月二九日　晴

京都から来た前田さんの車に、山本便乗。ところがまたもや。ちょっとした接触事故のためUターン。尾関氏便乗。垂水で待ち合わせのため電車で長船氏と伴に。何やらゴセ〳〵やっているうちに、ヨ～ル（つけたし2）前田さんの車の便乗者ー女性・男性ー「つはえる」と言い、三度めの正直、やっと岡山にむけて。高砂から運転交代わると、さっそく酒屋。三人（尾関、前田、長船三氏）の命を預かった山本クン、歯ぎしりして口に出す。「いつかころしてやる」。車は快調に岡山市↓新見市へ。計百六十キロを最年少の山本クン、運転しどおし。新見から前田さん、運転する。アルコールはまだ〳〵。やめてくれー〳〵と叫ぶ声をよそに、曲りくねった道。備中神代駅。前田はここから徒歩。今は車。やっとこさ着いたのは真夜中の二時半。

——忘れてた。レンタカーのことにふれて本番といたしましょうね。

レンタカーのほうも着いたのは夜中の一時ごろとか。岡山市内から今井さんをひろって農場へ。ところが雨で道はぬかるみ途中で荷を下してすぐさまUターン。29日の朝9時に戻らないと追加料金を払わにゃならぬとねでぎさに強行スケジュール。へそう〳〵　免許書を持って帰ってもらいました。

ついでに〈つけたし1〉軽四、いくらいじっても全然ダメ。しゃーないから、夏再度挑戦することにして置いてくる、ことにした。

四月三〇日（雨）（晴）

さ～て　いよいよ　本番

長い道中を終えた一行四人は、今井さんと初顔合せ。前号のレポートから想像するよりもずうーっと男まえ（若干のゴマすりもあり）。一息入れて寝ようと、酒屋はじまる。三時ごろネル。

ア～サァ。君は目をさます前に、今井さん、前田さん、さっそく車で荷はこび。以后、車は大活躍。朝めしをすませて、荷の運び役と畑の耕作役に分担して一日日をす

ごす。前日掘りおこした、カヤの株捨て。ふとんを、開拓地に定住している山本さん、永野さん宅で借りる。おかげでアッタカーイ夜をすごすことができました。（一晩とはいえ）。夜、山本さん宅で少し話しを聞く。

五月一日（はれ）

今日はメッチエンが来る！みんなはりきって（でもないなやっぱり）朝めしを食う。十時すぎまでハラ線張りのぐあい検討、2班に別れて、1班（尾関・前田氏）は、米子の方面から来るという話の女性を迎えに山を下る。残り3名は、ひきつづきハラ線張り。昼めしの準備が済んだとき二人、うら若き女性二人ひき連れまい戻る。昼飯で満腹の身体を庭先でねころびながらお茶をのむ。山奥にそゝぐ昼の日射。午后、山口、木下両さん——その二人の女性——は小屋の整理、あとの男性群は、荷物の運搬——まだ、しつこく続くんです——、タタミ入れ、畑仕事、ハラ線張り。夕刻、後藤さん着く。また石川のおばちゃんドーチャク。一日にして四人増え、ふとんの割当数減る。二日に今井さんが山を降りるため、彼が戻る四日までの計画を相談する。シイタケの植菌、完了。

五月二日（くもり）

今井さん朝早く下山。畑の耕作とハラ線張り。入口の門にペンキ塗る。このころ下の町で、援農群へのうわさとびかう。昨日も下に降りた尾関、前田両氏（長髪、ヒッピースタイルの尾関氏、丸坊主スタイルの前田氏）注目を浴びる。あっ、あれは何だ!! 赤軍派だ、……ヒッピーだ。（いや援農だ——と、そこまでわかってくれたかどうか）——これパロディのつもり。

角野、下条両氏着く。水道工事始める。体験を生かして長船さん、まず見積りから。マシュラの草を作る。（ヒマジン。）

五月三日（はれ）

本格的に水道工事始める。前田さん、下の店でホース値切る。「でもうこれからはまけませんよ」ってなことを言われたそうな。長船さん大奮闘してロ過装置作るが最終的には失敗。というのは、ロ過装置のためのコンクリート枠にひびがはいっていたのと、それと台所の水ための高さが逆になっていたため。

藤沢さん（備北開拓地で栗を作っている田舎のおやじさん）が来て、畑仕事について、いろいろ教えてくださった。そこで畑を再度掘り返すはめになり、計画は大分遅れる。夜藤沢さんを、今井さんの家に招いて飲みながらミーティング。（これは注目すべき多くの問題を含んでいるから、別にレポートを参照して下さい。ここでは割愛します）十一時半ねる。忘れてました。東京よりハルバル田中さんが到着。今回の援農で歩いて山を登ってきた唯一の人物。

五月四日（あめ）

島根大学の二女子学生、山口・木下両女史山を下る。すれちがいに今井さん、昼すぎ、バイクで岡山より戻る。雨の中を、畑の溝掘り、耕作種まき（下条・後藤・尾関・石川・田中・今井各氏）水道及び下水工事（角野・長船・山本各氏）やる。夜、共同体について若干の討論。もち、飲みながら。一時すぎ、車で尾関、石川、前田、長船、後藤各氏、山を下る。残り五人　さびしくなった部屋で雑魚寝。

五月五日（まったくの晴）

午后、二人が山を下るため、午前中に残った畑仕事を仕上る。角野、下条両氏、それに山本、一時すぎ、歩いて山を下る。今井さんも、その日山を下り、田中さんだけがのこる。

〈資　料〉

1 計画表

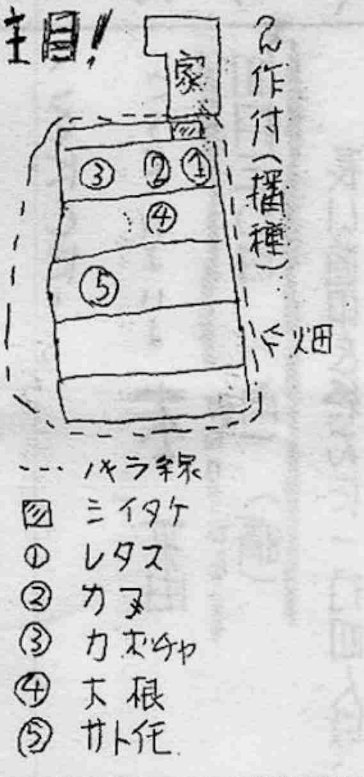
Ⅰ. シイタケの植菌、畑の耕作、播種、ハラ線はり。

Ⅱ. 風呂場、水道工事

Ⅲ. 牛小屋附近の土砂けずり、ひきこみ道路建設

Ⅳ. たきぎ集め（秋〜春のため）

2 作付（播種）



注目!

これだけは絶対忘れてはいけなかったこと

五月四日、下条氏、献身的に、便所の修理をして下さる。（ドカン、ニャカン、ドキ、雨アラレ。）

やっとこさ　かきおえて

まさか、ぼくがレポートを書くなんて夢々思ってもいなかったため、かなりの事実誤認、そして曲解があると思います。そこお許しのほどを！

個人的ですが思いついたことを二、三ほどかんたんに。

結局、ぼくにとって、「援農」でしかなかった。※

「消ヒ者」も実際に土をいじくってみる事も何らかの意味で必要ではないだろうか。（これは藤沢さんとの話し合いの中でつよく感じました。）

数日間の共同生活はうまくやれたね、共同体生活を（たとえば、やるとして）送ることは、このまゝでは可能だろうね。（疑問）

※それは、今井さんとボクを対置して、日中の労働だけをとって考えても、全くちがうことに気付いた。それは、体力的云々を云うまえの、やる気いとでもいうような事、つまり、生活の中における、農業というものの占める比重のようなものでしょう。